

住岡狂風著 パンフレット

惱める女性の胸に

定価 参拾錢  
送料 貳

念佛の父

定価 四拾錢  
送料 貳

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)  
昭和三年一月十五日發行(毎月一回十五日發行)

光 明 築拾卷第壹號

定價金拾錢

大正十四年七月一日(第三種郵便物認可)  
昭和三年一月十五日發行(毎月一回十五日發行)

# 光明

第十卷第一號

汝一心正念にして  
直に來れ  
我よく  
汝を護らん  
すべて水火の難に  
墮せんことを畏ざれ

大眞 日本 光明團本部發行

### ◆合掌宣言

第一、我は之れ久遠劫來の業苦に憫む。されど、傷き痛み憫める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。

第二、我はこれ會無一善、唯知作惡の凡夫。如來はこれ若く不生者不取正覺の本願力に生き給ふみ親、即惡深重煩惱熾盛の我を其まゝ救ひ給ふ。

第三、惠まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘しき輪廻の旅人。知らせん哉。彼の内に流れたまふ永遠の光明。聞せん哉。十方に響流したまふ招喚の勅命を。

第四、希くば自力小我の迷妄を破し、み光にはからばれて無我無謝の歡喜に生きん。

第五、「四海の信心の人は皆兄弟。」其處に共存の涙わく。共に和ぎ、慰撫し、策勵して、相愛に生きん哉。

### ◆本頌

毀譽褒貶に動するなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に精進せよ。  
救はれたる者は立つて、衆人類救済のために、熱き血と涙とを以つて、念佛無謝宣傳のために、濁亂の社会に猛進せよ。

## 謹賀新年

日

一

月

一

ありのまゝの相をのせて  
ありのまゝの相のなりで

時が舊年から新年にかはつた。

時の上に新年もなく、舊年もない。

唯人の上に新年があり、舊年がある。

新年なんぞ、舊年なんぞ、

無上正眞の實現者

南無阿彌陀佛をおいては

他のいづれにも終に意義あることなし。

時は流れる。其流れは早い。

元旦に立つて、年末をおもへ、

合掌なる哉！ 求道なる哉！ 念佛なる哉！

# 道を求めて

住岡 狂風

## 求道

新年にあたり特に歎異鈔第二章を拜讀致して、新らしく聖人にふれ、念佛しつつ本年を迎へたことを感謝し、恵まれた本年が、求道の一ケ年であるようにと念じつゝ、べンをとつてゐます。以下歎異鈔第二章について味はつてゆきます。

『各々十餘ヶ國のさかひをこへて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御こゝろざし、ひとへに往生極樂のみちをとひきかんがためなり。』

先づ最初に見出さるゝこの一節を深く味讀して萬感深く胸にわきおこります。我等は先づ其處に老ひませる念佛の聖人にあひ、道を求めてはるゝ京都にのぼつた眞劍なる求道者を發見いたします。

憶ひを七百年の昔にはせた時、日本の有様が描かれる。比叡山には老ひたりと雖天臺宗が今猶盛であつた。眞言宗の現世祈禱もあれば新らしく生れた日蓮の法華、浄土門内にも色々と派が生れてゐる、信を高調するもの行を言ひはる者、かくて日本は深い疑惑の雲におほはれてゐた。

『疑ひ……』それは決してそれだけで尊いことではない。しかしながら疑ひは尊いものを生み出す母体であります。疑ふ者は迷ふ、しかし迷つた者でなかつら救はれることも道を得ることも出来ない。親鸞聖人は關東の御住居をどちて、其晩年を京都でおくられた、其時のことであつた。かうした疑ひをもつた求道者たちが、常陸の國から、下總、武藏、相模、伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、近江、の諸國を経て京都に來ました。

七百年の昔です。『身命をかへりみず』この聖人の仰せは、文字通りの事實です。汽車も汽船も自動車もない昔のことです。關東から京都まで歩いて來ることは、命がけ

のやりかたです。

或處にのどがかわいて水がほしくてたまらぬ男があつた。丁度其時は大雨が續いて至る所大洪水であつたが、其渴いてゐる男は大洪水の中をあつちこつちと走つて水を求めたが、終に飲むべき水が見あたらないうで、のどが渴いて死んでしまつた。と其人が話しました。

確かにさうです廣島あたりはまさに説教の大洪水です。其洪水がたゞつて話は聞か話か話におはつて法の水をのますに死んでゆくのが今頃の同行の有様ではないでせうか。

疊の上であまり苦しめないで聞かれる。いや苦しめない處か、法は安價に賣られてゐます。求めるものよりも先きに與へる方が商人のやうに賣りつけてゐます。其處に眞の求道があるだらふか。

親鸞聖人は決して『末世末代の衆生よお前等に樂をさしたいばかりに俺はかうして十年の艱難辛苦は衆生可愛さの一念に……』といふやうなお心持は微塵もあつたのではない。そんな山師ではなかつたのです。自分の道が暗いので、眞に自分の救はれてゆく道を求めて行かれたのであつたのです。佛の救ひを豫想したり、天台宗の型にはまつたり、叡山の奴隸になつたりせられたのではなくて、どこまでも自分自身の救ひを求めてゆかれたのです。眞實を／＼と一貫した求道心は、虚偽や妥協を心から嫌ひました。だから自分の心にしつくりしない一切の宗教を破れ草履のやうに棄てました。そうして自分一人の救を成就してゆきました……。

と或る地で語りますと、それ異安心が來たぞと大變騒いで、お同行たちは、お寺に訴へてゆきます。お同行たちは『なあおばあさん、わしらがかうして疊の上で居眠りしながら樂々と一席のお説教も皆までいらぬほどもやすくお浄土參りがさせていた、けるのは、御開山様が、九十年が其間、末世の同行よかうして道を開いてやるでと、

佛様が生れかはつて御苦勞して下さつたので………』と考へてゐるのを傷つけ  
 たからです。勿論私とても末弟たちが、願海に浮んだ佛の化現として聖人を慕ふこ  
 とを拒めではないのです。それは師匠に對する弟子たちの心情であつて、當然であ  
 るかも知れない。しかし聖人は決してそんな心にもない策をもてあそんで見るほど偽  
 善者でも、香具師でもないのです。九十年の聖人の求道生活が決して我等の怠けの言  
 譯にも使はれなければ、聖人も末世に、淨土眞宗を今のやうな大きな王國にしやうと  
 する意志もなかつたのです。すでに聖人が血みごろな求道者であつたのです。身命を  
 培して求道に生きた方であつたのです。

三千世界にみてらん火をも

すぎゆきて佛のみ名をきくものは

釋尊は迦葉尊者に説いて云はれる、『迦葉よ。遠き古。まだこの世に佛の出でまさ

ぬ頃に、私は雪山に住んで菩薩の行を修めてゐた。地には薬木が一ばいに生えており  
 いろ／＼の鳥はその間に集ひ、流は清く果物はあまく諸の香の高い花が咲きはこゐた  
 私はその時、廣く大乘の教を求めてゐたが、得ることができなかつたその時諸の天が  
 私をあやしんで互に語りあふた。

『この者は、欲のさわがしい思を一切去つた寂かな心を持つた離欲の人である。  
 恐らく來世は帝釋天にでもなろうと思つてゐるのであらう。』

と一人の神は云ふた。

『世間には大士と云ふものがある。衆生をめぐむためにいろ／＼な修行はするが、  
 自分の爲をはかつては何事もなさぬ人である。かような人は生死のうえにのみ、過  
 ちを見るので、たとへば地に財寶が満ちて居つても唾を見ると等しく、少しも貪着し  
 ない、肉身の妻子や、下僕や、舍宅さへも捨て、又は天上の榮華すら望まない。唯  
 無上正眞の道を成し遂げて、一切の衆生を益まうと望んでおる。彼は益し、こうい

ふ大士なのではあるまいか。』  
すると帝釋天が云つた。

『若しおまへの云ふやうなことなれば、この人はすべての世間の衆生を救ひこる筈である。天子よ。世にたのむべき佛の大樹があるならば能く人天の煩惱の毒蛇を除くであるふ。衆生がこの佛樹のかげによるならば、煩惱の熱毒はなるはずであるもし彼が後に善逝となることがあるならば、我等はみな無量の煩惱をなくするはずである。けれどかようなことは、容易く信じられない。百千の衆生は、みな菩提に心を立てるけれど、極めて僅かな縁にふれても、その志はこわれてしまふではないか。ちようど水に影をやごした月が、さざ波にすら動いてゐるのとおなじようである、實のところ私は今日までさうしたおほくの人たちを見てきたのである。それでは、今彼のところへ行つてこゝろみ、その菩提といふ重荷に耐得るかどうかを知りたと思ふ。』

かくて帝釋天は直ちに姿を羅刹にかわつて雪山へ下り、朗な聲で

『諸行無常  
是生滅法』

(意譯) 諸行は無常である  
このゆへに生じたるものは滅する法なり。

どゆうた佛の唱れた偈文半分を唱えたのであつた。

この半偈を聞いた時の私の心持は、全く渴いた人の水を得、囚はれた人のはかに赦を聞いたやうなものであつた。喜びに耐へないで、直に座を立ち、手で髪をあげながら、四方にむかうて叶んだ。

『今尊い半偈をお説きになつたのはごなたでありますか。ごなたなればこそ、かくも尊い解脱の門を開く偈文をお説きになり、諸佛の道を示されて、飢れたものに無上の道をあじあはせ、私の心の暗を啓いて、蓮の次第にひらくやうに明るうさせて下さいましたか。』

ところは云つたが、しかし私の眼には、更に何者もうつらなかつた。そこには恐ろしい形をした羅刹があるだけであつた。私は思ふた。

『いま半偈を唱へたのはこの羅刹であろうか。いやそうではあるまい。あの恐ろしい形をした羅刹の口から、尊い諸佛の梵音が漏れ出るといふことは、火中に蓮華が生じ、日光から水が湧き出るようなものである。しかし彼の羅刹がもしや、古の諸佛にあふて、あの偈文を聞いたのかも知れない。』

こう思ひかねられるので、まづ羅刹に尋て見ようと決心した。即ち彼のところへゆ

か。

『あなたは何處でこの尊い半偈を得られましたか。』  
と尋ねた。すると羅刹は、

『いやそのことなれば尋ねてくれるな。實は私はこの數日の間何にも食べてはゐない。あちこちと食物をさがしてゐるが、どうしても得られない。そのため心が亂れ

て、思はず唱へたのがあの半偈である。別に心あつて唱へた譯ではない。』  
といふ。私は更に追つた。

『そう云はずにどうか教へて頂きたい。私は必ず生涯あなたの弟子になりませうあなたの今の偈文はまことに尊いものであるが、言葉も半分、意味も完全してゐない。財の施はつくることもあるが、法の施には盡くることがないとも云ふ。どうあつて教へて頂きたい。』

『いや汝は自分のことばかり考へてゐて、この私のことは少しも念ふてくれぬではないか。私は今飢へきつてゐる到底説くことなどはできない。』

『ではあなたの御食物は何でありますか。』

『問ふ要もあるまい若し云ふたら、何人も驚くであらふから。』

『こゝには誰もゐない。たゞ私だけである。何もおそれはいたしません。その御食物を云つて下さい。』

『それならば云はふ。私の食物は人間の暖い肉、私の飲物は人の熱い血、たゞそれだけが私の食物である。』

『それならば、ごうぞ後の半偈を説いて下さい。やがては死ぬるこの肉体である。私には少しの用もありませぬ。死んで虎狼や梟に喰べられるよりは、今大士に供養して、尊い法にかねた方が遙に本望であります。私は今この朽ちはつる肉体を捨て、永久に變らぬ、堅い法の身を得たひと願ふております。』

『いやさようなことを云つても、誰も信ずることはできない。』

『それは思しい言葉と思ひます。たとへば瓦や礫を捨て、七寶の器をどるやうにこの朽ちはつる身を捨て、金剛の身を得よう云ふのではありませんか。それでもまだ信じられぬと云はれるならば、私は諸天、諸菩薩、十方の諸佛たちに誓つてその證を立て、頂きませう。』

『それほど云ふならば後の半偈を説いてやらう。』

かくて羅刹はやう／＼に肯いた。私は衣をぬいで、羅刹のために法座として敷き、  
『ではごうぞ後の半偈を説いて下さい。』  
と等しく跪いて云ふた。すると羅刹は、

『生滅滅已 (意譯) 生滅に囚はる意を滅すれば

寂滅爲樂 (意譯) そこに寂滅の樂しきがある』

と説きおはり、

『さあ菩薩よ、私はこれで全部の偈文を説いた、汝の願ひは満されたであらふ。もし衆生を恵まふといふのであれば、私にその体を施してくれ。』と云つた。

迦葉よ。

私はその時、深くその偈文の義を味い、それから其偈文を、石や壁や、或は樹や、道のところ／＼に書きつけ、さて再び衣を着けて高い樹に上つた。すると樹の神が



『何をするのか。』

と私に尋ねた。

『偈文を頂いた御禮に、この身体を獻げようとするのである。』

『そのような偈文に、何の徳があるのか。』

『これぞ實に三世のみ佛達の正しい道である。』

私はかように答へて、更に、

『どうかすべての慳み強い人達や、また少しの施をして心たかぶる人たちに、今私が半偈のために尊い身をば、草を捨てるように、擲つものを見せてやりたいものである。』

と云つて、言葉おはると、樹から身をおごらせた。然るにまだ身が大地に至らぬ前に、かの羅刹は帝釋の身に復へつて、私の身を空で受取り、地上においてくれた。そして諸の天人たちと一緒に我が足もとにひれ伏して讃めた、わた。

『尊い志である。これこそ眞の菩薩である。能く量なき多くの衆生をお恵み下されたどうぞ私の罪を許して下さい。そしてもし無上正眞道を成し遂げられた暁はこの私をもお救ひ下さい。』

と云つて私の足に禮をなして去つた。

迦葉よ。私はこのように半偈のために此身を捨てたが、それか十二劫の後に、彌勒に先だつて道を成する事が出来たのである。迦葉よ私の量なき功德はこれみな如來の正法を供養してしまつた報ひである。汝も亦、今無上正眞の道に心を立てた。もう恒河の沙ほごに多い菩薩よりも超わすぐれている……。

これは有名な、『諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅已樂』といふ所謂雪山山偈の由來である。半偈を得るために身体を鬼にやる……とは一体何を意味するのでしようか。『身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御ころろざし……』  
……』聖人のお口よりもれた言葉の本源ではあるまいか。

大無量壽經に曰く

『人至心精進して道を求めて止まざることあらば、みな當に尅果すべし。何の願か得ざらん。』又曰く

『若し聞かば精進して求めよく法を聞いてよく忘れず、見て敬ひ得て大に慶べば、則ち我がよき親友なり。是の故に當に意を發すべし。たとひ世界に滿てらん火をも必ず過ぎて、要めて法を聞かば、念ず當に佛道を成じ廣く生死の流を濟ふべし。』  
親戀聖人はこの意を受けて、

『たとひ大千世界に

みてらん火をもすぎゆきて

佛の御名をきくひとは

ながく不退にかなふなり。』

と歌はれました。

□

年々歳々に京都をさして全國の同行が本願寺參詣に出かける。彼等はあの大伽藍を見て法の外面だけに、おどろきうたれてかへつて来る。しかしそれは法の眞髓ではな

い。金閣寺、清水、三十三間堂の見物、その序に本願寺の堂々たる建物拜觀………身命をかけて生死の一大事に突進する者何人かある。

『あなたは本願寺さんに參詣しなされたそうですが、奈良へもよりましたか。』

と問ふ者はあれど、『生死の一大事の解決如何?』と問ふ者ありや、

あゝ本願寺も亦、一個の參所、見世物と化してしまつたか。

『一步出たらいくらでも聞かれる。一寸書籍店に立ちよれば、いくらでも書物がある。だから身命をすてるほどの思がいるものか。』

といふ者があるでせう。

私は形を云ふのではない。真劍になれ！ 本氣になれ！ 後へはひかれぬ、一步もひかれぬ立場に立つて求道せよと叫ぶ

信仰が得られぬと云つて泣く人よ、一体どれだけ本氣で求めたか。

『いたりてかたきは石なり、至つてやはらかきは水なり。水よく石をうがつ。心源もし徹しなば、菩提の覺道、何事が成せざらんといへる古き詞あり、いかに不信なりとも、聽聞を心に入れて申さば御慈悲にて候間、信をうべきなり。只佛法は聽聞にきはまることなりと云々。』(蓮師)

序や、用事のかたはらの沙汰ではない。はるばる十餘國のさかかわを超へて眞一文字に求めてかゝる。其處に火のでるやうな眞劍な世界が表れる。

屑の時間でしたことは屑である。

いゝ加減な心持でしたことはいゝ加減である。

生命すらなげ出す思ひで求めたものが、生命以上の價をもつ。

### 往生極樂の道

現代青年は『往生極樂』といふことばを老人のたはごとくして一笑のもとに葬つてしまひます。死んだ後に極樂があつてたまるものか、それは無智な老人たちへの氣安めだ、坊主の商賣種にいゝ加減なことを云つてゐるのだ。科學が進んで人間も一個の動物であつて、肉体が減すれば細胞は原素に分解されて窒素になつたり土になつたりするのだ。往生極樂などゝは、一種の感情上の幻にすぎないのだ。と云ひきります。

そしてそれは物質的に見た存在上の現状として拒むことの出来ぬ事實です。

しかれば、往生極樂といふ問題は、それきり現代人には考へられぬ、過去の無智な人たちの夢として葬られてしまふでせうか。私たちは新らしい他の立場に立つてこの問題を考へてみねばなりません。

『往生』とは読んで字のごとく、生きてゆく、或は生れてゆく、とよみます。生きてゆく、生れてゆくことが往生であります。往生と云へばすぐ死を考へます。しかし決して死が往生ではありません。一体萬有は生々として活躍をつづけて、とまるものがありませぬ。みな『ゆく』のです。自然の大きいなる恵みによつて生きてゆく相が諸行無常であります。死すらのみ超えて生きてゆく、たねす新らしく、たねすより眞實に生れてゆく、これが往生であります。困つてしまつた時、『往生した』と云ひます。それは過去の人たちが造つた悪い習慣です。往生とは死ではなくて、現在の言葉で云へば『生活』です。生活とは單なる生存とはちがひます。

往生と極樂とははなすことのできない言葉です。ゆく者には方向があります。眞實の生活者のたどる道はそれは必然に極樂になります。極樂とは決して百味の飲食を味はれて遊んでゐる處ではなくて眞實生活の根底とする彼岸であります。現實のあらゆる悪を超えた最高の理念であります。我等の現實を全般に批判する光明であります。あ、彼岸の光明なしにどうして、我等の一日の生活がありませう。動物の生活と人の生活とちがふ處とは、この光明の彼岸を持つか否かで決定されます。

我等が求めるものは、人と人が争はず、戦はず、ものみなが、それ／＼そのところを得て、一つ／＼にだけあふた所謂『俱會一處』の世界であります。個性をもつたものが個性さながらに輝く所謂『青色には青い光が、黄色には黄な光が、赤い色には赤い光が、白い色は白い光』のある世界であります。淨土は常にかうした言葉で表はされてあります。眞理の輝く世界であり、理想の具体化された世界であり、或は最高人格の實現された世界であります。

だから『往生極樂のみち』とは、現在にも未來にも、本當に生きる道のことであります。さうです、永遠に眞實に生きるの大道が、往生極樂の道であります。(つづく)

÷ ÷ ÷ ÷ ÷ ÷ ÷ ÷ ÷ ÷ ÷

## と正忌を迎へる心 住岡 狂風

聖人様……………

雪が降ります。綿のような雪が降ります。雪を見ると私は私の生れた故郷の冬の日を憶ひ出します。雪の降る冬の日の故郷は、報恩講の營みや御正忌なごみ法の相續に恵まれてゐます。雪を見、故郷を思出す時、私は、あなたのことをしのびます。

一月十六日、それはあなたが生死の苦海からあの世へと往生遊ばした記念日であります。本年も亦其正忌が近づきました、

聖人様……………

嚴肅な生活者であつた聖人様、眞實より外に何物も眼中になかつた聖人、私は聖人様にお會ひしたことを心から喜ばすにはゐられませぬ。

あなたは、眞に道を求めたお方でありました。あなた自身の道を求めたお方でありました。あなたが藤原家を棄て、叡山にお上りになつたのも決して叡山で成功しようとなさつたではありませんでした。名と地位とを得んがためではなかつたのです。山にお上りになつたあなたは、あなた自身が問題であつたのです。自分自身を問題の中心にしたことにおいて、あなたほど眞剣であつたお方があるでせうか。

私はご正忌を迎へつゝ、聖人を憶念しつゝ、今更に深くあなたの生々しい御説法をいたさします。私どもは、かぎりなく名と地位とをあこがれます。終生愛欲、名利の

心に囚はれることでありませう。しかし名利を求める心があるからとて、それをゆるしその心のみ囚はれてゆきますならば、終に人生は道草でおはらねばなりません。あなたは、限りなくこの心をいたみつく道草をやめて眞實の道を憶念なさいました。『名利何ものぞ、愛欲何ものぞ、』と悟れる者の如く叫ぶことは、勿論おそろしい賢善をよそほふ偽善であります。賢善の聖者として装ふことも出来ず、と云つて名利の奴隷になつてしまふことも出来ぬ所に私の痛ましい悩みと、そして道があります。私どもはごうして聖者の如く氣取られませう。

そして又ごうして名利の世界に道草を食つてゐられませう。

叡山におのぼりになつた聖人が若し、堂々たる叡山の權勢に威壓され其學階と其僧位に眼がくらみ、人生の名利の成功者として終りなされたならば、人間の眞實の道、人間の生きる道は私の前に示されなかつたかも知れません。

眞實の救を求めて何ものにも妥協する事の出来なかつたあなたは、さうです妥協することの出来なかつたあなたは迷ひつゝ悩みつゝ、苦しみつゝひた走りに走られたのです。

救はれぬ魂のまへに、叡山が何です。天台が何です。門跡が座主が何です。哲學が何です………まつすぐに僞はぬ自己を凝視つゝ、自分を救つてくれぬものを反古の如く棄てゝゆく。修行を超え、祈禱を超え、學問を超え、宗教を超えゆく何といふ大膽でせう。何といふ眞實でせう。

時代の人たちとの妥協もありませぬ。いゝ加減な迎合もありません。ひたすらに求めて走る、嚴肅な求道の一路、國家でもなかつた、社會でもなかつた、宗門でもなかつた。自分の救はれぬ者に、ごに人のお世話が出来ませうか。

弱き善人は、周圍に威壓され、權力に媚びて、ひきずられつく流されてゆきます。あなたの眼は時代をも、自分をも、教團をも、ねめつけました、射通しました。鋭い宗教的理性、それは眞實なるものと眞實ならざるものとはつきり見分けられました。

しかしさうした人はいつもの時代でも寂しい世界をゆかねばなりません。たつた一人立たねばなりません。あなたはまことにひとりでありました。ひとりであればこそ『彌陀の五劫の思惟の本願をよく／＼案ずれば親戀一人がためなりけり。』その天地が開いて來たのでありませう。

聖人様……………

私どもはあなたが体験なさつた『罪惡生死の凡夫』といふ云葉を無反省に使つて來ました。二口目には『凡夫だから』と云ひます。あはれ聖人の血の叫び、深き体験の盛られたみ云葉も現實辯護の凡俗語となつてしまひました。『凡夫が如來に救はれるのだ』といふことは、はたして平面的な云葉であつたのでせうか。

或者は、無反省に、愛欲から愛欲に走つてあなたにあやまりました。或者は、凡夫とは聖人の謙虚さであるとして念佛生活を聖者のそれだとあやまりました。或者は凡人文化だの凡人生活だのと、あなたのお云葉を集めて、堅苦しい狭い型をつくつて、

はいりました、いゝね私どもがあなたの一面を外から見ると、それであなたを知つたと誤まり、單なる模倣者でおはらふと致します。あなたの一切は外からはめつたりかぶせたりした型ではなかつたのです。一切のさうした型や、はからひがこはされた時、おし出された一切が如來のみ手にあつたのです。煩惱の全体に廻向顯現された如來が、全的に救つたのであります。

お云葉一句でも、それは如來に根ざした生命それ自身の名のりであります。然るに所謂同行たちは其大部分が、聖人のこの生命それ自身であるみ云葉を切りと綴りあはせて功利主義の満足のために、使はふと致します。さうして無智なる同行たちは今や、極樂淨土に行かんがために聖人のみ云葉を利用せんとしてゐます。

聖人様……………

限りなく、あなたの世界に生れたいと存じます。あなたや釋尊と一つながれに生きたいと存じます。私たちの我を棄て、あなたと等流一如の世界に生きさせてもらふ

時、私は一番はつきり、私それ自身と、私自身の生きる道を知ります。

あなたが、『たとひ法然聖人にすかされたてまつりて、念佛して地獄におちたりとも更に後悔すべからずさふらふ』と申されたと同じく、あなたと一つなる流れに、この小さい我を見出さして戴く時、はじめて私が安らかであり、力強く感じ、生き甲斐を感じ、明るさを感じます。

合掌して聖人のみ言葉の一つ／＼に耳をかたむけます時、其一言其一句が私の心を培ひます。私は決して氣にいる部分だけをきりとつて、我の上に、それをひきかぶつて浄土にゆかふとすることは出来ませぬ。あなたは私の善知識にたまします。み教のまゝに生きさせて貰ひます。と云つてそれは決して私の心を旨にすることではありません、不思議にも、私が如來を憶念致します時、眞實の招喚に蘇ります時、あなたは私の前に立つてゐられます。

あなたは教主善知識にたまします。

如來は救主にてまします。

しかし私はあなたのみ言葉をいただく時、いつしかあなたと如來との一体にたましますことを感得いたします。噫。應現のあなたなくてどうして如來がありませうぞ。否如來があなたの上に生れさせたまふことを信せずして、どうして あなたの一句一句が如來のみ旨と拜まれませうぞ。あなたの一言一句は、わが靈の故郷、大自然界の奥に秘められたる如來胸中の秘密が、今更に私に明され、私に聞かされ、やがて私に廻向されるのでなくて何でせう。あなたによつてはつきりと叫ばれたる『善人なほもて往生をぞぐ、いかにいはんや悪人をや』との宗教の眞髓はそのまゝ如來胸中の極秘の聖旨でなくてはなりません。あなたはその聖旨に全体をもつてふれて救はれなされたのであります。されど人の子は何時のほごにかこの心臓を手にとつて弄びました。

あ、如來の心臓を弄ぶものゝ末路……………

聖人様……………



聖人の末弟たちは長い間に、聖人を偉大なる偶像にしてしまひました。あなたの心にもない殿堂を莊嚴してその中にあなたを祭り、それをあなたの御威徳のやうに信じました。恐かなる同行たちは、殿堂に壓倒され、大きなものが持つ威嚴にうたれて、それをあなたであるかの如く拜みます。

願はくば、あなたが七百年の昔、鋭い心をもつて如何なる時にも眞實の我と、眞實の道を失はず、いつも眞實の如來を拜まれたる、智慧の眼が同行の上に開かれて、唯一の如來、唯一の眞實、唯一の招喚に生きる日を願はずにはゐられませぬ。

御正忌が來ました。私どもは聖人のみ心に新らしくふれます。宗門を超ね、殿堂を超ね。偶像の前に、權勢の前にいらぬ道草を食う同行を超ねて、私は眞一文字あなたのみ胸に直參しなければなりません。

しかし私は寂しう御座います。あなたのふまれた道や、聖旨がほしいのではなくて功利的な極樂だけを求めて『もやすく、勞せず、はやく』と商買の如く考へる民衆た

ちどあなたを利用して贅食する輩たちは、又してもあなたのみ教にのみ生きて行かふとする者を敵として刃をむけます。しかし私は行かねばなりません。あなたを知つたのです。もし地上に生きねばならぬ價値があるならば、それは唯あなたに遭つたことだけであります。行かねばなりません。其道が如何に苦しくてもみ教の世界にすませて貰ひます。み法の世界は無限であります。はてしなき光明の廣海を念じつゝ今更に新らしき注意をよびましましつゝ聖人のみ教を生かさぬばなりません。(二月十一日)

講演豫定

一月 二十三日夜—二十六日 熊野支部

二十八日—三十日 河内支部

二月 一日—三日 本部例会

四日—月末 備後地方

暮  
の  
旅

□井仁光明團 十二月十日の午後一時廣島發、四時頃田の尻につくと、小田紅陽君が馬ををひいて迎へに來てゐる。雨のしよぼ降る中を井仁についた。會場は弘教講である。三四四晩の講演會である。憶へば大正十一年末、佐々繁白道がはじめて光明團の講演會を開いた時老人たちはキリシタンが來た耶蘇が來た。洋服を着て立つて話すことがあるか。異安心だと騒いだ時から、滿五ヶ年たつたのだ。求道に出發した青年團員たちは、五ヶ年間全く退轉しなかつた。その五ヶ年の試練は全く報ひられて、今や井仁のこの別天地は光明團化してしまつて、殆んど全戸をあげての求道である。さしも廣い弘教講も初めより滿員である。今は光明團と何だとかの區別もとりさられてしまつて全く一つになつてしまつた。五年間つゞくところには續くべき源泉がある。理想的な發展と云つてもいい。其處には中堅團員たちの沈黙の求道があつた人間へ立脚しての悩みがあつた。排撃されても批判されても一致して一道をならんでの精進は終に今日の盛況を見たのである。

□十四日朝井仁を出發して、加計を経て猪山に日暮方ついた。齋藤清太郎氏宅に入る。昨年の夏來講してから一年數ヶ月、齋藤氏其他熱心なる人々の世界はうんと進んだ。十八日の朝なつかしの袂を別かつて加計の佐々木に入つて一泊。

□大柿町更生會。  
二十二日より二十六日まで能美島大柿町大君に行く。十二月中旬になつて會の中心人物であつた川藤嘉一郎君は突然病魔に侵されて大往生をされた。川藤氏は大君の天地に如來の慈光を輝かさんとしてよく奮闘を續けてゐたので本團でも大變力にしておつたが三十二歳でなくなつてしまつた。氏は危篤に陥るも來訪者を激勵し、死を打忘れたが如く若き人たちに説法して逝つた。それがために一人の川藤死して多くの川藤が生れた。更生會は花々しい陣容と意氣を整へて求道の途に出發した。單なる盲信や形式に満足してゐられない若き人たちの悩みは如何なる障害にも打かつて彼等自身の世界を開拓すべく活躍ををはじめた。將來きつと見るべきものがあらふ。火ばなの

散るやうな眞劍そのもの、やうな會がおはつて二十七日本部にかへる。これで本年の講演をおはる。

□一月一日、午前四時佛前で元旦早々の勤行をすまして午前五時比治山山頭、御便殿の前に整列して君が代合唱、默想、感詞、團歌合唱、萬歳三唱、と遙拜式をすました。何とも云へぬ嚴肅な空氣が充ちて我等は年頭一步をふみ出した。

一日の夜は年であるためか集合の人が少い。二日の午後臺愚狂君が本部にかへる。二日三日とお正月もすぎてゆく。

□戸河内支部 一月四日―七日 雪が降る綿のやうな雪が降る中を自動車は怪物のやうに二つの目玉を輝しながら夕やみの中を走る。四時間突破して、戸河内村本郷丸山天籟君の宅に入る。會場は丸山松美氏本郷一の大邸宅である。雪の降りしきる中を同胞は。嚴寒をもいとはずおしよせる。光明團排撃のために用ひられる反動運動も默せる精進の前には効を奏せず。大成功裏に八日安野村津々見小田村人氏宅へ……………

## 同 情

自己のために他人を使はんとする時、常に腹をたてなくてはならない。

人のために使はれてあるとき、愚痴さ、不平がある。

我等は人を犠牲にしてもならぬ、ひさの犠牲になつてもならぬ。

自利他圓滿せる道、是菩薩道である。

あなたの荷物は一荷にあまる。どうにかしてあげたいけれど、私の荷物も一荷にあまる。

私の荷物の手が舍けぬ。私の荷物を忘れるとき、私の荷物を抛るとき、私の生命はなくなりませう。

獨生獨死 獨去 獨來

自分の荷物をひさに負はせず、ひさの荷物 of 世話をせず。

すべての人皆が、一荷にあまる荷物を背負ひ。しかも手傳ふことも、替ることもゆるされないさ知るとき、そこにこそほんさうの同情があるのではないでせうか。

—【おんが】—



# 正信偈講話

豫約募集

四十回にわたつて本誌にのせた正信偈を一冊にして出します。  
是非一冊お求め下さい。終生正信偈を拜讀しつゝ正信偈の何たる  
かを知らぬようでは駄目です。

一、定價 約壹圓

一、〆切 壹月末日

一、申込者五百名に達したる時印刷に着手します。

お友達や御近所におすゝめ下さつて一人で幾冊でも御紹介下さい。

## 注意

- 一。誌代拂込の際は光明と聖光との區別をばつきり記すこと。
- 一。轉居通知は新居住所を書いて下さい。舊住所がわからぬために時々事務は數時間を徒費します。
- 一。誌代拂込は振替を御使用下さい。切手は使はぬこと。拾錢切手などごうすることを出來ないで困つてゐます。やむを得ぬ時は五圓が紙錢切手に限りまします。
- 一。文字をばつきり正確にお書き下さい。略字で讀めぬ時があります。
- 一。主管に特別の用事の外、申込、中止、送金等は一切事務宛に御送附下さい。
- 一。事務上の間違ひがありましたら、御容謝なく事務宛に御申越し下さい。
- 一。誌代前金切の時はどうかお早く回送金を願ひます。お困りのお方は其旨御申越し下さい。

### 本誌定價

一部 金 十 錢 (郵税共)  
一ヶ年 金 壹圓貳拾錢 (郵税共)

毎月一回十五日發行

昭和三年一月十日印刷  
昭和三年一月十五日發行

編輯兼發行人 花岡 靜人

印刷人 佐々木温三

印刷所 光明團印刷部

廣島市八丁堀二十六番地

發行所 光明團本部

振替貯金口座下關貳番〇八番